

『豊饒の海』における月・富士・女性

——『竹取物語』典拠説の検討——

有 元 伸 子

三島由紀夫の遺作『豊饒の海』は、作者自身が「『浜松中納言物

語』を典拠とした夢と転生の物語」であると注記しており、おもに第一巻『春の雪』と『浜松』との比較考察が諸氏によって行われてきた。また、藤井貞和氏によって、物語の最終場面『天人五衰』の聡子は「俗界の人々と次元のちがう時間と場所とへ飛翔」する「老浮舟」なのだとの見方が提示されて以来、『源氏物語』との関連が探られるようになった。そして最近、小林正明・小嶋菜温子両氏によって、『竹取物語』を典拠とする説が浮上してきている。⁽³⁾⁽⁴⁾

ほかにも『狭衣物語』などとの関連も指摘されており、こうして古典との関係が統々と解明されていくことで、三島自身が「王朝文学と現代文学との伝統の接続を試みた」と述べていたように（『春の雪』について）、『豊饒の海』が、古典、なかならず王朝文学との対話によって成立するポリフォニーの性格をもつことが明らかになりつつある。クリステヴァのいう「相互テクスチュラ性」が示

されるものだとも言えるだろう。⁽⁵⁾

このように『豊饒の海』と古典文学全般との対話関係を考えることも興味深いのだが、本稿では、とくに『竹取物語』との関係に限定して検討してみたい。もともと『浜松』は、構成やテーマを、『源氏』（とくに「宇治十帖」）から影響を受けているとされ、その『源氏』は『竹取』の引用が明らかにしている。いわば、『豊饒の海』の典拠検討は、浜松—源氏—竹取と、古典の原点・深部へとさかのぼりつつあるわけなのだ。

その『竹取物語』と『豊饒の海』との相互関係は、先述したように、ごく最近になって、小林正明・小嶋菜温子両氏によって提唱されてきた。小林氏は第三巻『暁の寺』に注目し、『竹取』の基本資料の一つである都良香の「富士山の記」が出てくること、ジン・シャンにかぐや姫の面影があることなどを指摘された。この小林氏の読みを受けて、小嶋氏は、不可知論・不死といった哲学が両作品に見

られることや、月の世界と地上の世界との対比を示し、さらにかぐや姫の面影をジン・ジャンではなく綾倉聡子にも敷衍して、「かぐや姫—ジン・ジャン—聡子」という系譜を示された。

本稿は両氏の論考に強く触発を受けており、両論を継承しながら、『竹取物語』をコードとして『豊饒の海』を見ていく。具体的には、月・富士・女性といったモチーフをとりあげ、これまで主に古典文学の研究者によって開拓されてきた典拠説を、『豊饒の海』研究の流れの中に位置づけながら考察したい。従来、認識者・本多と清頭ら転生者が注目されていた『豊饒の海』だが、『竹取物語』をブレ・テクストとみなすことよって、聡子や月光姫ツキミツヒメなど女性たちに焦点があたり、物語の読み換えが可能になってくる。また、『竹取』を讀みのコードとして導入し、聡子をかぐや姫とみなすことよって、大きな空白と謎とをほらむ『豊饒の海』結末部の解説の進展が期待できるのである。

一月

はじめに「月」について検討したい。

三島が『豊饒の海』という題名は「月の海の一つ」によったと付記したように、テクストには月のイメージがいたるところに現れ出ている。とくに聡子と月光姫ツキミツヒメには「月」の喩が頻出し、かぐや姫に付与されたのと同様に光や美しさが与えられており、二人がかぐや

姫につながるとする小林氏・小嶋氏の論が裏付けられる。

また、『春の雪』末尾から『天人五衰』末尾までの六十年もの間、本多は、聡子がひきこもった月修寺を再訪しないのだが、「一縷の月光のやうな寺」と位置づけられる月修寺は、「強いて訪れれば、そのとき月修寺はわれから身を退いて、一時光りの霧のなかへ融け消えてしまふのではあるまいか？」と本多にイメージされる（『天人五衰』七）。一方、『竹取』では、かぐや姫を帝が無理に連れ出さうとされたときに、へかぐや姫、きと影になりぬ」と描写される。へきと影になりぬのへ影については、「光」「影」「幻影」と三様に説明されてきているようだが、「実態が存しないにもかかわらず、なんとなく姿が見える」状態だとか、「きゆうに影のようになつて姿を消してしまった」（『日本古典文学全集』）といった注釈を採用すれば、「光りの霧のなかへ融け消えてしまふ」月修寺の描写は、へきと影にへなつたかぐや姫の姿と重なりあおう。

このように、月光姫と聡子・月修寺には、かぐや姫と同じ超越的な月のイメージが重ねられている。もちろん、古来、「月」には女性のイメージが重ねられているのではあるが、それにしても、月光姫は生まれ変わりの人物、聡子は唯識を司る人物、と、本来この二人の女性は物語の中で系譜が異なっているはずだ。にもかかわらず、二人に共通して月のイメージがかぶせられているのはなぜなのだろうか。

こうした観点から、つづいて、そもその生まれ変わりの起源であり、聡子の恋人であった『春の雪』の松枝清頭についても検討してみよう。

清頭は、美青年として造型され、その目は「艶やかなほどの黒い光り」を放つ『春の雪』一。清頭の書生の飯沼が「若様の体といふものを、……私は、まぶしくて、ただの一度も直視したことがなかったのです」『奔馬』八」と述べるなど、彼は、他者の目から、光・輝き・眩しさといったイメージに統一されて描写されている。

さらに、清頭の異人性の現れであり、四人の生まれ変わる人物に共通して現れる転生の証拠が、左の脇腹のあたりの「三つの黒子」である。この黒子が、初めて読者の前に提示されるのは、清頭が、「月の冷たい光に浴さなければ納まらない気がしてきて」半裸の体に月光を浴びたときであり、「三つの黒子」は「月を浴びて」現れる『春の雪』五。民族学者N・ネフスキーは、「種々の民族は、月の斑点も、不死の思想と何らかの関係を有するものと考へた」『月と不死』と指摘しているが、清頭の転生＝不死の証拠である黒子は、月の斑点のメタファーと見なせるかもしれない。月の超越的な力は、聡子や月光姫のみならず清頭にも浴びせられている。

とはいえ、『春の雪』での聡子と清頭における月の関係は、微妙に異なっているようでもある。清頭が「御立待」——十五歳の年の八月十七夜の月を盥に映してその子の吉兆を占うという儀式——

——を行なったときのことである。清頭は、月が映るはずの盥の内側に「別の世界の入口」を感じ、盥の内の「丸い水の形をした自分の内面の奥深く、ずつと深くに、金いろの貝殻のやうに沈んである月のみ見てゐた」『春の雪』五。次いで、いったん獲得した「月」を喪失するのを恐れる清頭の心理が語られるが、「十五歳の十七夜の御立待のことを考へてゐるうちに、いつのまにか聡子のことを考へてゐる自分に気づいて、清頭は愕然とした」とあるように、この「月」は聡子を象徴している。「天にかかる月の原像を仰ぐのが怖かった」とも述べられて、のちに洞院宮妃になる勅許を得ることによって高貴な禁忌として清頭に意識されることになる聡子の姿が、仰ぐことのできない月の原像にはこめられているとも言えよう。かつて、清頭は、親友の本多に、それが何かはわからぬが「何か決定的なもの」「光りかがやく『決定的なもの』が欲しいと語った。『春の雪』二、四。『御立待』という鹿児島式の通過儀礼を通じて、「月」を得ることが、清頭の今後の人生の目標となっていくことを示しているのである。

また、御立待の回想からもう少し後の部分で、清頭は、「月の光りが玉の鸚鵡にだけ注ぎ」かかり、「その煙るやうな青の裡に透명한光りがこもり、鸚鵡がそのまま幽かな輪郭だけを残して、融けかけてゐるやうな異象に」驚く『春の雪』五。へぎと影になったかぐや姫を想起させる、月の超現世的な性格を示す場面である。そ

して、「浮薄なほどきらびやかに」見える月に、清頭は「聡子の着てゐた着物のあの冷たい絹の照りを思ひ出し」、「月に聡子の」「大きな美しい目を如実に見」た上で、前述したように、「月の冷たい光に浴さなければ納まらない気がしてきて」月光に裸身をさらす。ここでも、「月」は「聡子」のメタファーとして清頭には把握されている。鸚鵡を融して見せる異象をつかさどる「月」の力に、年上で何事につけ自分よりも優れており自分を支配する現実の聡子が重ねられる。聡子を恐れつつも、内心で彼女に惹かれる清頭の姿が、月光に我身をさらす清頭の行為に表れていく。清頭にとって、聡子は「月」にたとえられる人物であり、自らも、その「月」を恐れつつも関わりを持つとするのである。

では、聡子自身にとってはどうか。

聡子に皇族との婚約の勅許が下りたあと、清頭と聡子が禁忌を犯して、鎌倉の海岸の月の下で愛し合う場面がある。月は清頭と聡子の二人を照らす、このとき、聡子は「月を、空に炳乎と釘づけられた自分たちの罪の徽章だ」と感じる（『春の雪』三四）。貴種流離譚では流離に先立って罪が存在するが、聡子の感じた「罪」は、へかぐや姫は罪をつくりたまへりければ、月世界からこの世界に送られてきたという『竹取』における天人の言葉と照合する。かぐや姫の〈罪〉については、月世界における性的な罪ではないかとの推定もなされているようだ。もっとも聡子の場合、この世で罪を

犯したことで、俗世から月修寺に移るので、月から俗世に降下したかぐや姫と流離のベクトルが逆にはなるが、月・罪・流離という点で、両者は共通する。そして、この場面は、聡子が本多に二人の逢瀬の模様を語る言説の場だとの制約はあるものの、清頭が「月光の下での罪」の意識を表出した箇所はなく、この罪意識は聡子に独特のものだと言える。この点で、かぐや姫の末裔としての資格は、聡子の方により強く存在している。のちに自ら剃髪して月修寺に引き籠もる聡子は、「月」の超現世性を近しく感じているのだ。

だが、もちろん清頭にも月は関係する。本多は、「清頭が聡子の手を引いて、月光の庭を木影づたひに、海のはうへ駆けてゆくのを見送ったとき」、二人に「罪」の美しい姿を見た。さらに、月に照らされるのは清頭ばかりではない。第二巻『奔馬』の主人公・勲にも、はつきりと月は浴びせられていた。本多は能の『松風』を観るが、月の下で汐汲車をまわす松風・村雨の二人の精霊に、彼は清頭と勲の姿を重ねて見る（『奔馬』一九）。従来、「たわやめぶり」の『春の雪』は「月」の原理で、「ますらをぶり」の『奔馬』は「太陽」の原理だとされていた。だが、太陽の原理につきうごかされていたかに見える勲にも月は照射している。満ち欠ける「月」は死と再生のシンボルだとされるが、『豊饒の海』の中でそれが転生や唯識へとつながっていき、太陽をも超えて、全てを照らし統合する超越的な原理として輝いているのである。

つまり「月」とは、異人としての聖痕ではないのか。この世からかけ離れたものとして、「月」は象徴的に現出する。清頭が主人公かつ主な視点人物である『春の雪』においては、清頭によって超越的な力をもつ「月」にたとえられるのは聡子である。だが、常人である飯沼や本多から見れば、清頭も光り輝く人物になる。とくに、本多が視点人物としてせりあがってくる『暁の寺』以降は、聡子も清頭も勲も月光姫も、月を浴びる人物・自らと違う次元にいる異人として、本多からひとしなみに扱われるようになるのである。ただし、聡子のみは、自ら「月」にまつわる罪を自覚し、月修寺に引き籠もっていくのであるが、このことは『天人五衰』最終場面とも関わってくるので、後述したい。

こうして見てみると、『豊饒の海』では、『竹取物語』と同じように、月の世界とこの世という二つの世界に構造化できるようだ。小嶋氏も、「地上の迷界が「もの思ひ」に侵食されるに對して、月界は唯識を前提としないということ。生老病死の人間界と、かたや不老不死の天上界と。その対立は竹取においてあざやかだ」と指摘されている。『竹取』の世界は、〈月の都〉と〈この世界〉という対照的な二つの世界から成立している。〈月の都〉（もとの国・かの国・あの国）には天人が住み、〈きよら〉で〈老いもせず〉、〈思ふこと〉のない世界である。それに対して、地上Ⅱ〈この世界〉は〈穢き所〉であり、そこに住む人間たちは、老いや死を運命づけられ、〈思ふ

こと〉に満ちた生を送るのだ。また、天上での〈かた時〉の時間が、地上では〈二十年余り〉になるなど、時間の流れも二つの世界では異なっている。こうした『竹取』での二元世界が、『豊饒の海』ではどのように構造化されているだろうか。

その鍵を握るのが、四巻にわたって転生を見続ける本多である。¹³ 彼は、認識の力によって、世界を解釈しつくそうとする。有能な裁判官・弁護士として、社会的に「法」の側にたちつつ、俗世を超えた「法」をも希求しつづける。それが、親友・清頭の残した夢日記と唯識の壮大な理論とによって紡ぎあげていった「転生」であった。清頭に代表される転生者に対して、本多は、強い憧れをもちつつも嫉妬を呼び覚まされる存在として知覚している。

一方で月修寺のことを、本多は、「能ふかぎり杳かな寺、この世の果ての果てに静まる月の寺」であり、「およそ思考の極、認識の極に住することく、寺は冷光を放つやうになつた」と、美しく理想化してとらえている（『天人五衰』七）。そして、その月世界のような場においた聡子を、母なるものごとく遠くから憧憬し続けている。だがそれは、逆に言えば、彼女を自分の住んでいるこの世とは別種の世界に隔離し、辺境の聖域に祭りあげていることでもある。六十年の間、本多は「身に破滅をもたらすことのない美を拒む人のやうに」聡子に再会することを拒みつづけるのだが（『天人五衰』七）、それは、自分が大切に育み続けてきた「生まれ変わり」

の幻影を、唯識を知悉した聡子が否定するのを恐れていたからなのだ。本多にとっては、聡子も転生者たちも、月に象徴される異人たちは、思慕と排除のアンビバレントな感情を引き起こす人物たちだったのである。

実は、『竹取物語』の帝とかぐや姫の関係にも、そうした指摘がなされている。三谷邦明氏は、「帝にとつてかぐや姫は、抹殺しなければならぬ人物であるとともに、常に脳裏を離れない者」であり、『竹取物語』はこの世にかぐや姫を呼び出して、反秩序的なイデオロギーを背負わせて排除する物語なのである」と述べる。¹⁴三谷氏は、『竹取』を、地上の権力者である男性・帝が、かぐや姫という天上の女性を憧憬すると同時に排除する物語として読んでいる。また、小嶋菜温子氏も、「天と地の二つの圏界は相互にタブーの関係におかれていた」と指摘する。¹⁵「帝とかぐや姫」「この世と月の世界」とは、相互に排除しあうタブーの關係だと言っているのである。

三谷氏・小嶋氏が指摘するこうした二つの世界の排除と憧憬の構造は、まさに『豊饒の海』にも存在していた。『竹取物語』と『豊饒の海』、二つの物語は、テクストを支える世界構造のあり方でも類似するのだ。

二 富士

次に、『富士』のモチーフを見ていこう。「富士」は、『豊饒の海』

の中で、認識に関わるコードだと考えられる。

小林氏が指摘されたように、『暁の寺』には、『竹取』のプレ・テクストの一つともされる都良香の「富士山の記」を本多が読む場面がある『暁の寺』二八。

「白衣の美女二人あり、山の巔の上に双び舞ふ」といった記述から、本多は、「富士山」が「さまざまオクトイカヘな目の錯覚イロウツク」を呼び起こすのは、「冷たさの果てにも眩暈めまよひがある」ようなものだと思える。これは、実生活では弁護士として法の世界を厳正に司る「冷靜的確」な人間でありつつ、「眩暈」のようにめくるめく輪廻転生の物語を幻想し、見つけっていく本多のあり方と重なるものだと言えよう。また、「双び舞ふ」「白衣の美女二人」とは、聡子と月光姫ツキノヒメの喩だともとれるし、『松風』親能の時のように清頭と勲の喩だともとれる。富士という特殊な場で、この世ならぬ特異な人物二人が本多の前で舞うのである。

本多自身も、富士を「ひとつのふしぎな極であり、又、境界であった」と認識している。異界とこの世との境界にあって、幻想の許される場——それが「富士」なのだ。そして、本多にとつての「異界」が、月の法に則った世界＝聡子のいる奈良の月修寺であり、「この世」が本多の住まう東京だとするならば、「富士」は地図上でも二つの世界の「境界」に位置している。

また、小嶋氏が指摘されたように、『暁の寺』以降、テクストに

は「不死」の問題が主題として浮上してくる。そして、『竹取』では、地上にもたらされた〈不死の薬〉が富士山の上で燃やされる。「不死」は、富士山の語源の一つでもある。

しかし、富士と『豊饒の海』との関係は、これらにとどまらない。

『春の雪』の冒頭で、「得利寺附近の戦死者の弔祭」と題される古びたセピア色の写真が提示される(『春の雪』一)。「数千人の兵士」が「中央の高い一本の白木の墓標」に向かつてうなだれているという構図のこの写真は、清頭と聡子の恋の進行につれ繰り返し現れ、諸氏によって「死」という『豊饒の海』全体の主題を暗示するものだと、その重要性が指摘されてきた。だが、「死」を示すために、なぜ「数千人の兵士」が写された写真が必要なのだろうか。そこで『竹取物語』のコードを導入してみよう。『竹取』では、かぐや姫昇天のあと、残された帝は、へ駿河の国にあなる山の頂へ行つて、姫からの手紙(帝の手紙ととる解釈もある)と不死の薬を燃やすように命じ、へ土はつちどもあまた具して山へのぼりけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づけける」と語られる。へ土どもあまた具すから、土に富む↓富士という富士山の語源を解説して、『竹取物語』は閉じられる。とするなら、『豊饒の海』の冒頭に「数千人の兵士」による弔いの写真が提示されるのは、このテキストは『竹取』の最終場面に続いていくのであり、物語内部に『竹取』のコードを組み込んでいるのだという、テキストの密かな宣言とは言

えないだろうか。

テキストと富士との関係はさらに続く。同じく『春の雪』の始めに、先代の月修寺門跡が唯識の教えをやさしく説いた場面がある(『春の雪』四)。「唐の世の元暁」は、野宿した夜にくらやみの中で側にあった水を飲み、たいへんおいしく感じた。ところが朝の光で見ると、それは餓餓の中にたまった水だったので、吐きもどしてしまったという法話である。「しかしそこで彼が悟ったことは、心が生ずれば則ち種々の法を生じ、心を滅すれば則ち餓餓不二なり、といふ真理だつた」と、本多は法話を振り返る。ところで、「不二」は、ここでは仏教用語として「ふに」と読むべきだが、この語は「ふじ」とも読め、「二つとない、並ぶものがない」の意で、「富士山」の当て字の一つでもある。

このように、「不死」、「富士」、「不二」と、テキストには、富士山を示すことばがカラーージュのようにちりばめられている。そして、これらは、言葉遊びでありながら、いずれも認識・哲学に関わるという点で共通するのだ。

テキストにおける富士の意味を確認したところで、再度、元暁の挿話に戻りたい。

「餓餓不二」の「不二」(＝二ならず)は、次のように説明される仏教哲理である。

現実の世界には種々の事物や事象が生起しているが、それらは

自己・男女・老若・物心（色心）・生死・善悪・苦楽・美醜などのように、相対立する二つの枠で整理される。しかし、それから二つのものは、それぞれ独立・固定の実態（我）をもって存在しているのではなく、無我・空のもとで、根底は不二・一体をなしている。つまり、〈不二〉とは、〈空〉を関係の上に言い直したものである。（『岩波仏教事典』¹⁶）

元暁は、同じ水をあるときは清らかに甘く感じ、あるときは穢れとして吐いてしまったのは、心の働きによると悟った。意識によって、一つものが相対立する現象として見えたのだ。一切は、みな心の働きによって生じる。だから、諸現象の発生の原因となる意識の働きを止めれば、清濁二つに見えていたものは、觸體ただ一つ（不二）となる。さらにつきつめれば、不二の觸體すらも自己の心（識）の現れにすぎない、という「空」の思想へと収斂していく。現実世界で「二」に対立して見えるものも、真理としては「不二」||空なのであり、それを知覚することが「悟」るところなことなのだ。このように、『豊饒の海』の開始早々に、聡子の前任の月修寺門跡によって、テキスト全体を司る唯識の基本が提示され、本多はこの段階では一応これを理解したかに見える。

だが、『暁の寺』には、本多によって「不二」とは全く逆の認識の仕方が示される。本多は、濃紺の夏富士を見るとすぐにわきの青空に目を移し、残像の力によって真白い冬富士の幻を見る見方を編

み出し、「富士は二つあるのだ」「現象のかたはらには、いつも純白の本質が」と考える（『暁の寺』四二二）。私見では、これこそが本多が生まれ変わりを見る見方を象徴するものなのである。彼は、認識の変換によって、例えば現実の勲の上に、生まれ変わりの勲の幻をかぶせていく。こうした見方は、「不二」ではなく、逆に「二」を見ていると言える。元暁が「心が生ずれば即ち種々の法を生じ、心を滅すれば則ち觸體不二なり」と悟ったのはうらはらに、本多は「心」||自分の認識にこだわって、「種々の法」||自らが作り上げた輪廻転生という現象を見ていくのである。若き日の本多は、悟る前の元暁は自分の「心象が世界を好き勝手に描いてゐただけ」「春の雪」四）だった、と総括していた。だが、本多自身の輪廻転生に対する認識こそが、まさに彼の「心象が世界を好き勝手に描いてゐただけ」の幻想にすぎなかったのである。

本多の認識法は明らかに唯識の真理とは相反するもののだが、彼自身には意識できていない。しかし、「富士」のコードを導入すると、「觸體不二」による唯識の見方と、「二つの幻の富士を見る」ような本多の認識の仕方とが、根本的に異なっていることが明白になる。「富士」は、月世界とこの世との境界であるとともに、異世界をかいま見ようとする現世の人間の認識の限界を示す表象でもあるのだ。

三 『天人五衰』——聡子とかぐや姫

最後に、『天人五衰』の結末部について考察していきたい。

本多は六十年ぶりに、清頭の恋人であった聡子に会いに、奈良の月修寺を訪れる〔『天人五衰』三〇〕。末期癌の本多は、一生の終わりに聡子と二人で清頭のことをしみじみと語り合い、自分の見てきた転生を全的に認めてもらうことを期待していたと思われる。

しかし聡子は、「その松枝清頭さんといふ方は、どういふお人やした？」と、実に意外な言葉を発する。松枝清頭と聡子は、勅許による禁忌を侵して愛し合い、聡子は彼の子どもを身ごもりながら、墮胎し、月修寺にひきこもったのであった。そうした劇的な恋愛の相手だった清頭のことを、聡子は「お名をきいたこともありませんと語り、その実在すらも否定してみせる。本多のみならず読者も、これまでの読書体験そのものが霧の中にかき消え、まさにへきと影に」なったように茫然とさせられてしまう。

ここでも『竹取物語』のコードを導入し、小嶋氏の指摘に従って、聡子にかぐや姫のイメージを重ねてみよう。かぐや姫が月世界に戻るときに、天人は「天の羽衣」と「不死の薬」を持参する。へ衣着せつる人は、心異になるのであり、人間界でのへ物思ひがなくなるのだ。

ところで、小林正明氏は、『源氏物語』における『竹取』受容を

論じる中で、出家して薫からの遣いを断った浮舟はかぐや姫である
と述べ、手習巻が『竹取物語』の吸収と変形だと指摘している。

「尼衣」は「天の羽衣」であり、この二つは、「アマゴロモ」という音声だけではなく、「捨世の象徴という機能の面でも、軌を一にしている」というのだ。また、物語の中に『竹取物語』が「強圧的な構造として君臨」し、その「引用構造に後押しされる形で、浮舟は『かぐや姫』として再生し、『かぐや姫』として男を拒絶し、『かぐや姫』として俗世から離脱するだろう」とも述べている。

このきわめて興味深い指摘をふまえて、ふたたび月修寺の聡子を見てみると、聡子門跡は、まさに「白衣に濃紫の被布」（＝尼衣＝アマゴロモ＝天の羽衣）を着て、本多の前に現れたのであった。また、「六十年を一足飛びに、若さのさかりから老いの果てまで至つて」「浮世の辛酸が人に与へるやうなものを、悉く免れてゐた」ともあり、「不死」のイメージも所有している。「天の羽衣」と「不死」、この世と峻別される月世界にかぐや姫が昇天したときの属性を、聡子は二つながらもっている。さらに、「本多が聞いた六十年は、聡子にとつては、明暗のけさやかな庭の橋を渡るだけの時間だったのであらうか」という叙述もある。『竹取』の中で、地上の「かかた時」が、「月の都」では「二十余年」であったことを想起すると、月修寺にひきこもった聡子は、月の都に戻ったかぐや姫の末裔と見ることができよう。だとすれば、へ衣着せつる人は、心異に」なり、へ物

思ひ)がなくなるのだから、聡子が『春の雪』にあった禁忌の恋をすべて「知らない」というのもうなづける。

ただし、「聡子はかくや姫だ。だから、思うことのない世界にいるのだ」と言い放つだけでは、不十分である。それでは聡子の主体性を認めないことにもつながりかねない危険性ははらんでしまう。

論者は以前、『春の雪』の清頭と聡子の恋愛は、聡子の側から見れば家父長制社会に対する抵抗であった、と述べたことがある。これは、「禁忌の違反」の対象といった形で、それまで清頭の側からのみ眺められて、副次的な存在だとされつつづけていた聡子の主体を発掘する試みであった。この読みを發展させれば、結末部分についても、本多が男性として認識・幻想しつづけてきた転生の世界を否定する女性として、実体的にとらえることができる。また、森孝雅氏は、さまざまなモチーフを組み込みながらテクストの構造を的確に示した上で、聡子の「ある種巧妙な機略の匂い」をかき取り、最後の聡子のことばは「本多の自我のカルテを素早く見抜いた上での、対機説法という機略」だと説破する。¹⁹⁾

物語の内側の論理からすれば、このように聡子の言葉の謎を一応説明することはできる。しかし、にもかかわらず、『豊饒の海』を読んできた読者は、なお割り切れない不可思議な気持ちに包みこまれたままなのではないか。清頭の存在を知らないと言語の聡子の姿は、「いささかの銜も韜晦もなく、むしろ童女のやうなあどけない好

奇心さへ窺はれて、静かな微笑が底に絶え間なく流れてゐた」と描写される。テクストは周到に、彼女の作為を否定する言辭を用意していたのであった。

田中美代子氏は、『天人五衰』結末部の聡子のことばについて、次のように言う。²⁰⁾

それでも尚、聡子は実際はこれらの理屈を前提とした上でしらをきり、本多に謎をかけているのか、教えをたれているのか、突き放しているのか、或いはまた素直に清頭のことや悲恋のあげく自身尼となった経緯や昔あったそれらのことすべてを事実上忘れてしまっているのか、ははつきりしない。

現実がその余波をとどめている以上、おそらく半ばは本当であり、半ばは嘘であるのかもしれない。「それも心々」と彼女が云うとおりにちがいないだろう。

結末の聡子の言葉をめぐる解釈を列挙した上で、それらがいづれも相対的なものにすぎないことを述べており、重要な指摘だと言えらる。テクストの中に、聡子がこのように語った理由は書かれていない。また、そのことばを語った聡子自身、『春の雪』の結末部で出家してからは『天人五衰』の最終場面に登場するまでの六十年間、テクストの表層に登場することは全くなく、テクストの中の大きな「空白」になっている。彼女の生活・理念・感情を、読者は直接知ることできず、これまでの彼女を根拠にして、最終場面の彼女の

ことを読み解くことも不可能だ。だから、『豊饒の海』の結末においては、この解釈しかありえないという絶対的な読みはありえず、この「空白」部分を読者が埋めていくしかないし、どんな読みであっても、それは解釈の一つ、可能性の一つでしかない。

だがそれにしても、従来、管見では、田中氏のあげた解釈のうち、「しらをきり、本多に謎をかけている」、「教えをたれている」といった読みはなされているが、「素直に、事実上忘れてしまっている」という見方は、可能性として示されることはあっても、実際に論として提出されたことはないようだ。一定のリァリティが要請される近代小説では、例えば「記憶喪失」といった装置でももちこまないかぎり、登場人物が「すべてを事実上忘れてしまっている」となど、許されざることだからであろう。

しかし、『豊饒の海』には『竹取物語』が溶け込んでおり、「聡子はかぐや姫であった」との読みは、そうした『豊饒の海』の不可思議さに根拠を与えるものだと言える。聡子を实体化して読みを深めていくと同時に、そうした一元化した読みには収斂しきれない曖昧さ、〈物思ひ〉のない月の世界に帰還し、〈心異に〉なつてこの世のできごとをすべて忘れてしまった者の言葉、という可能性を読むことで、本多の男性的な認識世界を否定する女性としての聡子の存在感・實在感がより重みを増し、『豊饒の海』結末部の不可思議な世界が高まっていくように思える。

聡子は、女性であることよって、清頭や本多といった男性主要登場人物から、他者≠異人として見なされていた。清頭からは、「月の冷たい光」にたとえられ、「別の世界」にある「何か決定的な」禁忌の対象とされた。その清頭の思いを六十年の間醗酵させていた本多からは、「この世の果ての果てに静まる月の寺」に住まう聖母のような存在に祭り上げられた。「月」は、こうした俗世の人物にとっての異界であり、思慕と排除の二律背反の象徴である。と同時に、聡子は、あたかもかぐや姫のように、月の下での「罪」を意識し、月修寺に自らを閉じ込めていった。他者から貼られたレッテルに抵抗すると同時に、月の法の世界に自らをおいて、俗世を超越した存在にもなりえたのである。

* * *

以上、「月」「富士」「女性」の三点について、『豊饒の海』とブレ・テキストとしての『竹取物語』との関係を検討してきた。その吸収と変奏とはまことに柔軟に行われ、『豊饒の海』は、認識をめぐるきわめて近代小説的な哲学を『竹取』のモチーフの中に投げ込むと同時に、硬化化した近代小説を超越する手立てともしている。

「秘められたブレ・テキスト、竹取」——と評したのは小嶋氏だが、概略だけなら幼児でも知っているほど人々に親しまれている古物語を自らのうちに引用して、『豊饒の海』はより豊かな世界を

築きあげていった。『竹取』のコードによるさらなる解明を、テキストは読者に求め続けているのである。

注

- (1) 「三島由紀夫をめぐる」『国文学解釈と鑑賞』一九七八年一月
- (2) 西村巨「豊饒の海」論(1)『共立女子大学文科紀要』23、一九八〇年。伊藤守幸「優雅の変質——春の雪」への一視点」『弘前大学国語国文学』一九八九年三月。上原作和「女の言説／男の言説」『物語研究会』『物語——その転生と再生』一九九四年、有精堂。
- (3) 小林正明「竹取物語」と信仰——この縁はありやなしや」『国文学解釈と鑑賞』一九九二年一月。(以下、特に注記しない限り、小林氏の論とはこの論文を指す)
- (4) 小嶋菜温子「『豊饒の海』にみる転生と不死——『竹取物語』をプレ・テキストとして」『物語研究会』『物語——その転生と再生』一九九四年、有精堂。(以下、特に注記しない限り、小嶋氏の論とはこの論文を指す)
- (5) 鈴木泰恵「『狭衣物語』と〈禁忌〉——『豊饒の海』への転生を視野に入れて」『前掲』『物語——その転生と再生』
- (6) 「どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にはかならない」『セメイオチケー』原田邦夫訳、一九八三年、せりか書房
- (7) 本稿では、作家三島が『竹取物語』を意識して『豊饒の海』を書いたのかどうかについては触れないが、以下、三島と『竹取』との接点について、略述しておく。

(a) 評論——古典文学に関する三島の著述は極めて多いが、『竹取物語』については皆無に近い。わずかに、「羽衣も竹取も古き世の物語である。神々

の物語はいふもおろか」(「懸詞」昭和一八年)との記述があるが、前後の文脈から、ここは謡曲「かぐや姫(竹取)」を指すものと考えられる。

(b) 加藤道夫『なよたけ』(昭和二年)——『竹取物語』はかうして生まれた」との端書をもつ加藤の代表戯曲『なよたけ』に関して、三島は、「死の予感の中で、死のむかうの転生の物語を書く。芸術家が真に自由なのはこの瞬間なのである」(加藤道夫氏のこと、昭和三〇年)と評しており、「転生」の視座から『豊饒の海』との関連もあるかもしれない。なお、加藤と三島との交友については、矢代静一『旗手たちの青春——あの頃の加藤道夫・三島由紀夫・芥川比呂志』(一九八五年、新潮社)が詳しい。

(c) 折口信夫の「貴種流離譚」——折口は「小説戯曲文学における物語要素」において、『竹取物語』などから「貴種流離譚」の概念を提示した。そして、三島は、自作『沈める滝』(昭和三〇年)は「貴種流離譚」であると明言している。また、『豊饒の海』執筆開始と同年には、折口をモデルにして短編『三熊野詣』を書いている。

(d) 『美しい星』(昭和三七年)——空飛ぶ円盤と交感し、自分たちを火星・金星などから来た宇宙人だと自認する家族の物語。最終場面では、円盤が一家を迎えに着陸する。三島は、この作品の執筆前後、天体やUFOに多大な関心を寄せていた。そして、『竹取物語』は、日本におけるSF物語の先駆けとも言える作品である。

(8) 本論では、「月」「富士」といったモチーフについて論述していくが、『豊饒の海』と『竹取物語』の関係はそれだけにとどまるものではない(ただし、『竹取』の「竹」のモチーフ、翁のコミカルな造型、求婚譚などは『豊饒の海』にはなく、もちろん、物語のすべてを撰取しているわけではない)。

(a) 月光姫は、『暁の寺』第一部では七歳、第二部では十八歳と、一挙に加齢される。そして、この間、本多は、倭幸により財産を得て、悠々自適の

生活を送るようになる。これは、『竹取物語』の「小き子譚」「到富譚」の
話型と類似する。

(b)月光姫は同性愛者で、本多や本多が手配した青年を拒否する。彼女が異
性と触れない設定は、『竹取物語』のかぐや姫の結婚拒否につながる(『異
類婚姻譚』の話型)。

(c)本多の「覗き見」(『晝の寺』『天人五衰』)は、『竹取』の「垣間見」の
戲画的な継承とも考えられる。

(d)「天人五衰」(二・四・七・八)に類出する「天人の羽衣の裂」、「羽衣
の松」、謡曲「羽衣」、「天人五衰」、「飛天」などのモチーフは、『竹取物
語』が「天人女房譚」の話型をもつこととも関連する。

(e)光かがやく美男子が禁忌の女性を犯すという清頭の姿からは、光源氏を連
想せざるをえないだろう。高橋亨氏は、光源氏には「月」が喻えられてお
り、そうした「月光の伝統をさかのほれば」「かぐや姫をはじめとする
『変化のもの』としての物語主人公たちにならなっている」と指摘されて
いる(『色このみの文学と王権』一九九〇年、新典社)。清頭は光源氏の末
裔であり、かぐや姫につらなる月光の異人性が、彼の生まれ変わりである
月光姫に継承されていったと考えられる。

(f)岡正雄訳、一九七一年、平凡社東洋文庫。初出は、一九二八年。

(g)久保田淳氏は、「月」に「皇后中宮」のメタファーがあることを指摘し
ている(『国文学』一九九二年二月臨時増刊号、「古典イメージ」の「月」
の項目)。

(h)「オタツマツ(御立ち待ち)」という鹿児島市で行われていた成年式につ
いて、柳田国男「分類祭祀習俗語彙」(一九六三年、角川書店)と、松前
健「月と水」(『日本民俗文化大系』 太陽と月 一九八三年、小学館)に
記述があった。

(i)本多の認識と転生や聡子との関係については、以下の拙稿をご参照いただ

きたい。

『豊饒の海』における『転生』——妄想の子供たち』『日本文学』一九九
五年六月

『豊饒の海』における『沈黙』の六十年』『日本近代文学』53、一九九五
年一〇月

『反転する竹取物語』(「読み」とテキスト)『物語文学の言説』一九九二
年、有精堂

『竹取物語』にみる皇権と道教——不死の薬の歴史から』『日本文学』一
九八八年四月

中村元他編、一九八九年、岩波書店
『最後の浮舟——手習巻のテキスト相互連関性』『物語研究』一九八六年、
新時代社

拙稿「綾倉聡子とは何ものか——春の雪」における女の時間』『金城学院
大学論集』国文学編36、一九九四年三月

『豊饒の海』あるいは夢の折り返し点』『群像』一九九〇年六月

岡田中美代子「解説」(新潮文庫『天人五衰』、一九七七年)

〔付記〕

本稿は、一九九五年度広島大学国語国文学会春季研究会(一九九五年六
月二五日)における口頭発表に補筆したものである。席上ご意見をいただい
た方々に感謝申し上げます。

なお、『豊饒の海』の引用は新潮社版『三島由紀夫全集』により、旧字は
新字に改めた。また、『竹取物語』の引用は小学館『日本古典文学全集』に
より、その本文はへんてきで示している。

—— ありもと・のぶこ、鈴峯女子短期大学助教 ——